

ハイデガー・フォーラム第2回大会

特集 「アリストテレス—ハイデガーと古代ギリシア」

レジュメ

なぜ若きハイデガーは『動物運動論』を「広範な基盤」として『魂について』と『ニコマコス倫理学』を解釈する計画を『ナトルプ報告』で立てたのか

坂下浩司（南山大学）

1922 年秋に成立した『ナトルプ報告』のアリストテレス論構想を見ると、その第1部は『ニコマコス倫理学』『形而上学』『自然学』、第2部は『形而上学』『動物運動論』『魂について』そして再び『ニコマコス倫理学』を解釈することが計画されていたことが分かる。

「本研究の第二部では、解釈の重点を『形而上学』第七巻、第八巻、第九巻に置く。……〔中略〕……ついで、この存在論的な地平の中に『〔ニコマコス〕倫理学』を置くことによって、同書が、人間存在、人間の生、生という動性をもった存在者の解明であることが明らかにされる。それは、まず先に、生という存在分野が特定の動性であることを解明し（『動物運動論』の解釈）、その広範な基盤の上に立って『魂について』をその存在論的＝論理的な体制に向かって解釈するという手順でなされる。」（GA62, 397. 高田珠樹訳、マルティン・ハイデッガー「アリストテレスの現象学的解釈——解釈学的状況の提示——」、『思想』、813号、1992年3月、39頁。強調は発表者。）

高田氏の邦訳も Van Buren の英訳（Van Buren, J. (ed.), *Martin Heidegger, Supplements: From the Earliest Essays to Being and Time and Beyond*. SUNY, 2002. p.143）も、この箇所に注をつけていない。しかし、第2部のこのリストは、非常に興味深いと思われる。

まず、古代哲学史の知識がある人にとって興味深いはずである。『形而上学』、『ニコマコス倫理学』、『魂について』は、アリストテレスの主著として知らぬ人のない大著であるが、これらと比べると、『動物運動論』は、ボリュームの点だけみても片々たる小著であり（ベッカー版アリストテレス全集で6頁しかない）、また知名度の点でもかなり見劣りするように思えて、なぜこのような小篇が3つの主著と肩を並べるように言及されており、また、『ニコマコス倫理学』や『魂について』の解釈にとっての「広範な

基盤」になるのだろうか？と興味を持つであろう。

さらに、アリストテレスの専門家にとっても興味深いはずである。『ナトルプ報告』が書かれたのは、1922年なのだが、アリストテレス研究者として著名なイエーガーが、長い間偽作の疑いをもたれてきた『動物運動論』の真作性を論証したのが、その9年前の1913年のことなのである（Jaeger, W., *Das Pneuma im Lykeion. Hermes, Bd.48, 1913. pp.29-74*（特にその「I. Die Schrift *Peri zoon kineseos* in ihren litterarischen Beziehung zu den Schriften des Aristoteles」(pp.31-42)）および Jaeger, W., *Aristotelis De Animalium motione et De Animalium Incessu. Ps-Aristotelis De Spiritu. Leipzig (Teubner), 1913* によって)。ハイデガー自身、1926年夏学期講義『古代哲学の根本諸概念』で、『動物運動論』、アリストテレスの真著。これはW・イエーガーが証明した」と述べた記録が残っている（GA22,308、邦訳版全集359頁の「メルヘン筆記録」第83節）。当時の最新のアリストテレス研究の成果をきちんとフォローしているだけでも特筆すべきことであるが、『動物運動論』を、アリストテレスの主著の解釈にとっての「広範な基盤」にするほどに重視する点が驚くべきことなのである。というのは、現代のアリストテレス研究者たちの間で、『動物運動論』が非常に注目すべき著作であるという認識が広まったのは、おそらく、1978年の Nussbaum の画期的な本（Nussbaum, M. C., *Aristotle's De Motu Animalium. Princeton, 1978*）以来のことだからである。たとえば、Nussbaum の本以前の訳である岩波版アリストテレス全集の島崎訳では、『動物運動論』と『動物進行論』の解説が、合わせてたったの2頁しかない。いかに重視されていなかったかが分かるであろう。それゆえ、Nussbaum の本以前にこれほど『動物運動論』を重視できたのは驚くべきことなのである。いったい、ハイデガーは、『動物運動論』のどこに注目して、それほどの重要性を認めるにいたったのだろうか？

そこで、次のように問うてみたい。『動物運動論』の何がそんなに若きハイデガーの関心をひいたのだろうか？そして、なぜ『魂について』や『ニコマコス倫理学』よりもむしろ『動物運動論』が「広範な基盤」になると判断されたのだろうか？これはおそらく、ハイデガーの専門家によっては問われたことのない問いであろう。しかし、初期ハイデガーのアリストテレス受容に関する新しい発見へといざなわれるような問いではないかと私は考えている。

本発表は、『ナトルプ報告』の、実現されなかったアリストテレス論第2部の構想を述べた箇所と「付論 (Beilagen)」(GA62, 397-399, 403-415) を検討することを通じて、『動物運動論』を取りあげる意図をできるかぎり読みとろうとするものである。

さらに、その線に沿ったかたちで、『存在と時間』の執筆時期と重なる講義『古代哲学の根本諸概念』(1926年夏学期)の「講義原稿第66節：生命の分析」と「メルヘン

筆記録第 84 節」(GA22, 186-187, 309-311) を参照しながら、『動物運動論』(特に、「欲求(オレクシス)」を根本的なものとして動物——人間を含む——の行動を実践的三段論法で分析する後半) の一般に知られざる思想内容を、『ニコマコス倫理学』や『魂について』と比較しつつ紹介する。

最後に、1926 年夏学期の講義『古代哲学の根本諸概念』で『魂について』論の著者リスト(GA22, 183)に『動物運動論』だけではなく『動物進行論』が加わっており、また、『存在と時間』刊行後の 1929 年の演習題目も、「上級：生の本質について、アリストテレスの『魂について』『動物運動論』『動物進行論』を特に考慮して」となっていることの意味(『魂について』の後は、『自然学小論集(*Parva Naturalia*)』に収録されている『感覚論(*De Sensu*)』と『記憶論(*De Memoria*)』を取り扱うのが伝統的なやり方であるのに、ハイデガーはその伝統に逆らっているようである)を、一般にほとんど知られていない『動物進行論』の生物的世界論を紹介しながら考察してみたい。

以上。